

K-842

# 分布調査報告書

1990年

長井市教育委員会

# 分布調査報告書

1990年

長井市教育委員会

## 序

この報告書は、平成元年度に文化庁の補助を受けて実施した「致芳地区遺跡分布調査」の結果をまとめたものであります。

この分布調査は昭和62年度から実施してきたもので、今年度行なった致芳地区の調査でひとつの区切れを迎えることになります。

これまで致芳地区で知られている遺跡はごく限られたものであります。この度の調査で地域的にも時代的にも多くの貴重な資料を得ることができました。それに多くの方々に調査の参加協力をいただき、それぞれの地域に伝わる伝承や文化財に接し、あらためて文化遺産に対する関心を得たことは、かけがえのない慶びであります。

生活の向上と文化財保護は、つねに背中合わせと言っても過言ではありません。近年、埋蔵文化財と開発事業のかかわりが増える傾向にありますが、進められる開発のなかで誠意ある調整をはかり、埋蔵文化財の保護につとめる所存であります。地域に伝わる埋蔵文化財を後世に伝えることにより、わたしたちの心のなかに由緒として刻まれ、ひいてはこれから時代を担うまちづくりにも大きく寄与することでしょう。

最後になりましたが、本調査を進めるにあたりご指導ご協力いただいた関係各位ならびに地元の方々に、心から感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財保護のための一助となれば幸いです。

平成2年3月

長井市教育委員会

教育長 鈴木泰助

## 例　　言

- 1 本書は、長井市教育委員会が国庫補助を得て、平成元年度に実施した致芳地区を中心とする開発事業等にかかる遺跡詳細分布調査の報告書である。
- 2 調査期間は平成元年6月1日から平成2年3月31日までである。
- 3 調査体制は次のとおりである。

調査主任 佐藤正四郎（長井市埋蔵文化財専門委員・県立米沢女子短大講師）  
調査員 岩崎義信（長井市教育委員会主事）  
調査参加者 安達勇三 安部博之 荒生小太郎 荒生隆三 飯沢一男 飯沢長吉  
飯沢半右エ門 大川長蔵 小野寺哲 金田寿栄 黒坂美佐 古口源吉 小松慎一  
佐々木喜太郎 佐藤 進 佐野六榮 色摩健蔵 鈴木六兵衛 平 金次 平 周市  
高井敬造 高橋紀平 高橋 正 高橋千晶 手塚保夫 沼沢正吉 沼沢与一 沼沢里  
吉 芳賀徳市 松木英蔵 松木正三 松木新助 松木良夫 松木六衛 村上新一  
本木辰雄 森岡春一 守谷兎臺雄 横沢 嶽 横山吉次 渡部金六  
事務局長 斎藤 隆（長井市教育委員会 教育主幹）  
〃 補佐 平 美智子（〃 主幹補佐）  
事務局員 岩崎義信（〃 主 事）

- 4 本調査にあたっては、次の方々にご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。  
山形県教育庁文化課、南陽市教育委員会、加藤 稔（山形考古学会副会長）、本木辰雄（須刈田大野平遺跡地権者）、茨木光裕、山口博之、石井浩行、致芳地区史談会、致芳地区公民館、長井市産業課
- 5 挿図・付図の縮尺はスケールで示した。土器拓影図は $\frac{1}{2}$ 縮尺で採録した。
- 6 遺跡番号は、致芳地区の頭文字「C」を付して、C-1、C-2……とした。
- 7 本書の編集は佐藤正四郎・岩崎義信が担当した。執筆はⅡ章の3・4を佐藤 進が担当し、他は佐藤正四郎・岩崎義信が担当した。挿図・図版等の作成は佐藤光二、佐藤進高橋千晶の補助を得た。

## 目 次

I 調査区域の概要 .....	1
II 調査の経緯 .....	3
1. 調査に至るまで .....	3
2. 調査の方法 .....	3
3. 調査の経過 .....	4
付表1 分布調査工程表 .....	4
IV 遺跡の概要 .....	5
V 遺跡の位置と現況 .....	15
VI 遺物について .....	31
VII 須刈田大野平遺跡確認調査 .....	36
1. 須刈田大野平遺跡これまでの歩み .....	36
2. 遺跡の立地と環境 .....	36
3. 検出された遺構 .....	37
4. 出土遺物 .....	39
VIII まとめ .....	49
1. 現地踏査について .....	49
2. 須刈田大野平遺跡について .....	50

## 挿 図 目 次

第1図 分布調査遺跡位置図 .....	2
第2図 遺跡位置図 .....	15
第3図 遺跡位置図 .....	17
第4図 遺跡位置図 .....	19
第5図 遺跡位置図 .....	21
第6図 遺跡位置図 .....	23
第7図 遺跡位置図 .....	25
第8図 遺跡位置図 .....	27
第9図 遺跡位置図 .....	29
第10図 柱穴変遷想定図 .....	37

第11図 住居跡平面図と土層セクション .....	38
第12図 土器拓影図(1) .....	40
第13図 土器拓影図(2) .....	41
第14図 土器拓影図(3) .....	42
第15図 土器拓影図(4) .....	44
第16図 土器拓影図(5) .....	45
第17図 土器拓影図(6) .....	46
第18図 石器実測図 .....	48

## 図 版 目 次

図版1 遺跡現況 .....	16
図版2 遺跡現況 .....	18
図版3 遺跡現況 .....	20
図版4 遺跡現況 .....	22
図版5 遺跡現況 .....	24
図版6 遺跡現況 .....	26
図版7 遺跡現況 .....	28
図版8 遺跡現況 .....	30
図版9 分布調査遺物 .....	32
図版10 分布調査遺物 .....	33
図版11 分布調査遺物 .....	34
図版12 分布調査遺物 .....	35
図版13 須刈田大野平遺跡出土遺物 .....	51
図版14 " 遺跡出土遺物 .....	52
図版15 " 遺跡出土遺物 .....	53
図版16 " 遺跡出土遺物 .....	54
図版17 " 遺跡出土遺物 .....	55
図版18 " 遺跡出土遺物 .....	56
図版19 " 遺跡出土遺物 .....	57
図版20 " 遺跡の遠景・住居跡 .....	58

## I 調査区域の概要

長井市は置賜盆地の北部に位置し、西は朝日山系のけわしい山々が連なり朝日、祝瓶などの高山がそびえ、東は出羽丘陵が南北にはしつていて、中央部を最上川が北流し置賜野川と合流しており、むかしは水害に悩まされた地域である。

白鷹町と接する白兎地区はむかしから靈場として崇められた薬山を有し、現在多くの信仰をあつめ市民の登山コースにもなっている。また、朝日山系のふもとは広大な鋸野が広がり土器や石器の散布が見られるほかに、土壙が9基確認されている。昭和59・60年の二カ年にわたり国学院大学によって発掘調査が実施され祭祀遺跡の報告がなされている。また、基盤整備が行き届いた水田地帯からも遺物を採集することができたのは大きな収穫であった。

最上川左岸の成田・五十川両地区は標高約195メートルの沖積平野がひろがり、水田や畑地となっている。そのなかで比較的標高が高く微高地になっているところでは土器や石器の出土がみられ、土師器の高杯の出土も伝えられている。さらに両地区で特徴的なことは限られた範囲のなかで数多くの館跡が伝えられていることである。あまり密集して館跡があったため西館・東館と総称されたという。現在西館と呼ばれている平吹戸宅は昭和40年代に土地改良事業が行なわれるまでは、幅3間の棚が周囲を巡っていた。しかしのほかの館跡は遺構の一部として土塁が残っている程度である。また、通称「トツマ」とよばれる五層からなる石塔は鎌倉時代の所産といふ調査結果を得ている。

最上川右岸の森・東五十川両地区は背後に山出羽丘陵をひかえた河岸段丘上に位置し、これまで未踏査の地域であった。森地区の通称「塔の上」には石塔の一部が残っており、成田の「トツマ」とともに親しまれていた。形態から推測すると五層の石塔の一部で鎌倉時代のものとみられる。東五十川地区には室町時代の名僧宥日上人誕生の地と伝えられているところがある。上人は応永3年(1396)生僧で生まれ77才で入寂したが、後世に様々な逸話伝承をのこしている。「火伏せの靈力」もそのひとつで、彼が画湯を使った井戸や入寂した井戸の水を3月13日に汲みとり屋根にかけると防火の効があるといわれ現在でも地区の人々の深い信仰を得ている。

以上のように本地区は土壙・館跡・石塔・言い伝えなど、中世に関する事柄が数多く伝わっている。



第1図 分布調査遺跡地図

S - 1/50,000

## II 調査の経緯

### 1 調査に至るまで

長井市街地の北部に位置する致効地区は、近年時代の要求によって宅地や工業団地の造成計画、またそれらに伴う道路の工事も數多くすすめられてきている。

宅地造成について、近年成田地区は人口の著しい増加にともない宅地の造成がさかんに行なわれている。また、本地區東側は工業団地として開発を計画し企業誘致が行なわれ、企業の進出がはじまっている。これらの予定地は、置賤野川と最上川によって形成された河岸段丘上にあり、近くでは土器や石器の出土が伝えられ遺跡の立地条件にも適したところである。

これらに対処するため市教育委員会は関係機関と協議を経て、致効地区全域を対象にした遺跡詳細分布調査を行ない遺跡の保存と活用に役立てるために、国庫補助を得て平成元年6月1日から調査を実施した。

### 2 調査の方法

#### (1) 聞き取り調査

現地調査を実施するにあたり地元の郷土史会や文化財の保護団体を通じて、土地にのこる昔からの言い伝えや畑の耕作・土木工事における埋蔵文化財の出土等について聞き取りを行なった。また、土器や石器の所有者からは、出土地点や収集年月日についても情報の提供を受けた。

#### (2) 現地踏査

調査区域を大きく四つに分けて現地踏査を実施した。聞き取り調査をもとに、地形や行く先々で遺物の散布や出土情報を収集しながら、新規遺跡の発見につとめた。調査参加者が調査区ごとにそれぞれ地元からの参加を得たので、細部にわたって情報を得ることができた。

#### (3) 遺跡の確認調査

須刈田大野平遺跡は本市と南陽市にわたって位置しており、これまで数回にわたり発掘調査が行なわれ貴重な資料を得ている。とりわけ萬葉時代早期の資料の重要性については県内はもとより全国的に知られるところである。また、遺跡を見下ろす丘陵には「大野平キャンプ場」がつくられ保存・活用がなされ、地域興しの核にもなっている。これらのことから長井市分にかかる範囲を中心に遺跡の確認調査を実施した。

### 3 調査経過

遺跡詳細分布調査は、山形県教育委員会の指導を受けながら長井市教育委員会が主体となり南陽市教育委員会、山形考古学会、山形大学歴史学研究会、致効史談会、致効地区公民館、長井市産業課の協力を得て実施した。

経過については調査の方法でも述べたが、聞き取り調査、現地踏査、遺跡の確認調査と分けて実施し行程表(表1)のとおりである。また、現地踏査は後述のとおりである。

須刈田大野平遺跡確認調査は期間が10月2日から10月11日で延べ9日間、長井市と南陽市にかかる萬葉時代早期後葉から前期初頭の堅穴式住居を確認した。詳細については第Ⅱ章を参照されたい。

致効地区現地踏査は12月4日から12月20日までの間延べ8日間にわたり実施した。

12月4日 白兎地区北西部を中心踏査する。三五星敷、薬師林、砂畠、半在家でそれぞれ遺物を探集し、外屋敷、光明寺跡を確認する。

12月5日 白兎地区南東部を中心踏査する。深沢館、色摩館を確認し小豆沢、三五ヶ坂、袋西、袋西、袋Ⅱで遺物を探集する。

12月6日 五十川地区北部を踏査する。長者館、四ツ谷館をそれぞれ確認する。岡、宮内、酒町、蛇塚で遺物を探集する。

12月7日 五十川地区南部を踏査する。唐人屋敷、野原、中宿で遺物を採集。掃部館、西館、大屋敷、大土井は範跡であることを確認する。

12月8日 成田地区北側を踏査する。本宿西、八百刈、唐網でそれぞれ遺物を採集する。また、岡では塙を確認した。

12月9日 成田地区南部を踏査する。塔様、三島、飯沢館、安藤館、渡部館、中川原、伊那大権現をそれぞれ確認する。

12月19日 森地区を中心踏査する。打越、塔の上、鍵音堂、山田で遺物を採集する。大寺沢で塙を、また古お屋敷と塙ヶ森で範跡を確認する。

12月20日 東五十川地区を踏査し、虚空像、狗木沼を確認する。

表1 分布調査行程表

期日	平成元年 9月	10月	11月	12月	平成2年 1月	2月	3月
須刈田大野平遺跡 確認調査	2 11 日						
聞き取り調査		19 日					
現地踏査				4 11 19 20 日 日			
報告書作成				1		31	

### III 調査の概要

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目
C-1	散布地	三五屋敷	長井市白兔字三五星敷	縄文時代	桑畑
C-2	寺跡	光明寺跡	長井市白兔地内	中世	杉林
C-3	散布地	薬師林	長井市白兔字薬師林	縄文時代 近世	桑畑 畠地
C-4	散布地	砂畑	長井市白兔字砂畑	近世	蔬菜畑 桑畑
C-5	包蔵地	外屋敷	長井市白兔字外屋敷	縄文時代	水田 宅地
C-6	散布地	半在家	長井市白兔字半在家	縄文時代 近世	水田 宅地
C-7	館跡	深沢館	長井市白兔字深沢	中世	畠地 杉林
C-8	散布地	小豆沢	長井市白兔字小豆沢	奈良・平安	畠地 宅地
C-9	散布地	三五へ工坂	長井市白兔字三五へ工坂	近世	果樹畠 道路
C-10	散布地	袋西	長井市五十川	縄文時代	畠地

立地	遺跡概要	遺物	備考
段丘	六道辻の東側山麓は、切畑沢によって段丘が形成されている。以前、沢沿いの段丘上の桑畠から石器や剝片が採集されている。	搔器	新規
山麓	白兎簡易水道の北西、田沢沿いの平坦地に位置する。明徳4年の創建といわれ、五輪塔の一部や周辺には方形の小規模な塚が残存する。		新規
山麓	葉山神社の北約170メートルの蔬菜畠上に位置する。周辺は桑畠や杉林となっており、遺跡の中央部を幹線水路が北に向かって流れている。	剝片	新規
段丘	白兎共同墓地の北西に位置する。No.1とは地続きの段丘上にあり、蔬菜畠に遺物の散布が見られ、周辺は桑畠となっている。	陶器	新規
平地	白鷹町との境で、水田地帯の中央部に位置している。昭和40年代に暗渠排水工事の際に、荒生小太郎氏宅の北側の水田から遺物が出土している。	磨製石斧、石皿	新規
平地	全龍院の東約400メートルの水田地帯に位置する。高橋紀平氏宅南側の畠に遺物が散布する。戦前耕作中に石棒も出土しているという。	縄文土器、剝片	新規
段丘	最上川と深沢によって形成された河岸段丘上に位置し、東に張りだした段丘は北東隅が小高くなっている。崖に沿って三段のテラスが築かれている。		新規
平地	県道長井・白鷹線沿いに位置する。北側からのがる微高地の裾野にあたり、東は人家他は水田に囲まれた畠地に遺物の散布が見られる。	土師器	新規
微高地	No.8の南東約100メートル、最上川によって形成された河岸段丘上に位置する。微高地の中央部に農道がある。周辺の畠に遺物が散布する。	陶器	新規
平地	袋地蔵の西約100メートルに位置する。東と南に集落があり北と西には広大な田園が広がる。農道北側の桑畠から若干の遺物を採集する。	縄文土器	新規

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目
C-11	散布地	袋	長井市五十川	縄文時代	畠地 宅地
C-12	館跡	色摩館	長井市五十川	中世	宅地 畠地
C-13	館跡	四ツ谷館	長井市五十川字四ツ谷	中世	神社 水田
C-14	館跡	長者館	長井市五十川字鼠原	中世	宅地 畠地
C-15	散布地	宮内	長井市五十川字宮内	近世	畠地
C-16	散布地	酒町	長井市五十川字酒町	平安時代	畠地 宅地
C-17	散布地	岡	長井市五十川字岡	平安時代	畠地 宅地
C-18	散布地	蛇塚	長井市五十川字蛇塚	中世	畠地
C-19	散布地	唐人屋敷	長井市五十川字唐人屋敷	縄文時代 中世	畠地
C-20	館跡	播部館	長井市五十川	中世	宅地 畠地

立地	遺跡概要	遺物	備考
平地	No 10 の南約 100 メートルに位置する。南西側に水田が広がり北東には宅地がならぶ。遺物は宅地のあいまの耕作された畑上に散布する。	磨石片	新規
平地	袋地蔵の北東約 100 メートルにある。現在は宅地となっており遺構は残っていないが、色摩七之丞の居館跡であるといわれている。		新規
平地	土地改良以前は葉山神社の西側に三間幅の堀が残っていたと言う。またその外郭の堀や用水堀も本館跡の施設といわれているが、居館主は不明。		新規
平地	最上川と草岡川の合流地点の南西約 500 メートルの地点に位置する。以前堀跡が残っていたといわれているが居館主は不明である。		新規
平地	宮内公民館の道路をへだてた北側の畑に遺物の散布が見られる。	陶器	新規
段丘	蘿安神社の南側のホップ畑から多量の須恵器を採集する。また、戦後の耕作で深掘りしたさいにも土器が出土したという。	須恵器	新規
段丘	正寿院の東側一帯は、最上川によって形成された河岸段丘になっており遺物が散布する。また、昭年 40 年代にも素焼きの土器が出土したという。	陶器	新規
微高地	集落センターの西側は畠や墓地になっているが、若干の起伏がみられる。微高地の頂から北斜面にかけて遺物の散布がみられる。	陶器	新規
平地	致芳小学校の西側の畑から須恵器片を採集する。また戦前には耕作のさい土器や石器（石轍）が出土したという。	須恵器	新規
平地	小島氏家の西側には土塁が残っている。また本遺跡の西側も遺構は見あらないものの掃部館と伝えられ周辺一帯を東館と称したという。		新規

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目
C-21	散布地	野際	長井市五十川字野際	縄文時代 中世	水田 烟地 宅地
C-22	館跡	西館	長井市五十川字西館	中世	宅地 烟水田
C-23	館跡	大屋敷	長井市五十川字大屋敷	中世	水田 宅地 墓
C-24	館跡	大土井	長井市五十川字大土井	中世	宅地 烟水田
C-25	散布地	中宿	長井市成田字中宿	縄文時代	烟地
C-26	散布地	本宿西	長井市成田字本宿西	縄文時代 近世	烟地 宅地
C-27	散布地	八百刈	長井市成田字八百刈	近世	烟地
C-28	祭祀	開	長井市成田字開	中世	墓地 烟地
C-29	散布地	唐網	長井市成田字唐網	縄文時代	烟地 宅地
C-30	包藏地	塔様	長井市成田字塔上	縄文時代	宅地 道路

立地	遺跡概要	遺物	備考
平地	平沢川と出来ヶ沢の合流地点の西側にあたる。現在は一部が土地改良事業にあっているものの、大正時代には石巻が出土している。		新規
平地	昭和40年代の土地改良で屋敷濠は埋められたが、42間×48間の規模をもつ環濠武家屋敷である。屋敷内には正応二年の年号をもつ大日板碑がある。		新規
平地	大土井橋の北側は高台となっており、堀が巡りその広さは一町にも及んだという。現在は土地改良のため一部東側に当時の地形が残っている。		新規
平地	No.23の南西部に位置する手塚氏宅西側には、土壘のなごりも見られる。No.22からNo.24の館跡は総称し西館とよばれ、東館に相対する名称である。		新規
平地	成田駅南東約300メートルに位置する。東側は主要地方道に沿った宅地が並び、西側は畠や水田が広がる。	磨石	新規
平地	No.25の約200メートルに位置する。側溝整備のあげ土のなかに遺物の混入が見られる。	須恵器・陶器	新規
平地	主要地方道の東側で福蔵院の北約300メートルに位置する。用水路付近の畠に遺物の散布が見られる。	陶器	新規
段丘	長井北工業団地の南西部、最上川によって形成された低位段丘上に位置する。12×7メートル高さ1.2メートルの壇が1基みられる。		新規
微高地	福蔵院の北約150メートル、佐々木氏宅の畠から石器を探集する。以前耕作の際にも土器や石器が出土しているという。	剝片	新規
段丘	段丘の先端に位置する。昭和56年飯沢氏宅で造成工事の際石器が出土した。付近には鎌倉時代のものといわれる石塔(五重)がある。		新規

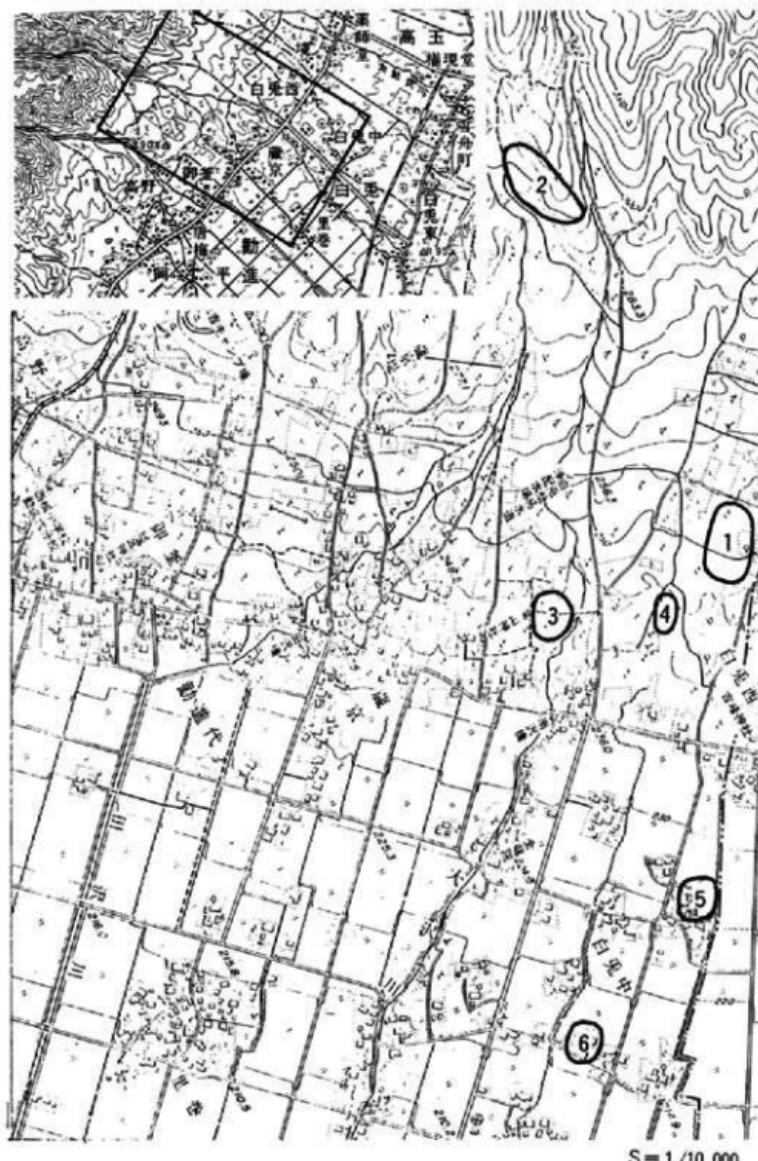
遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目
C-31	散布地	三 島	長井市成田字三島	縄文時代	畠地 宅地
C-32	館 跡	飯 沢 館	長井市成田字三島	中 世	宅地 畠地
C-33	館 跡	安 部 館	長井市成田	中 世	畠地 宅地 水田
C-34	館 跡	渡 部 館	長井市成田	中 世	宅地 水田 畠地
C-35	祭 祀	伊 津 那 大 権 言	長井市成田	近 世	宅地
C-36	散 布 地	中 川 原	長井市成田字中川原	縄文時代	荒地
C-37	館 跡	亀 ケ 森	長井市成田字亀ヶ森	中 世	杉林
C-38	館 跡	虚 空 像	長井市五十川	中 世	雜木林
C-39	散 布 地	駒 木 沼	長井市五十川	縄文時代	雜木林
C-40	散 布 地	觀 音 堂	長井市五十川	縄文時代	畠地

立地	遺跡概要	遺物	補考
微高地	主要地方道の西側に位置し、周辺一帯は成田地区でも比較的標高の高いところである。昭和59年に畑の耕作時に石器が出土している。	石匙	新規
微高地	飯沢長吉氏宅の西側に高さ約1.5メートル長さ約1.0メートルの土塁が残っている。同氏宅には県指定文化財の「飯沢文書」が伝わっている。		新規
平地	フラー長井線沿に位置し、現在も土塁の一部が残っている。文献によると東西45間・南北50間あまりの規模をもつ館跡であったという。		新規
平地	通称「北館」と呼ばれている。旧長井線が本遺跡の中央部を通り、昭和40年代の土地改良で土塁や堀が破壊された。現在土塁の一部が残っている。		新規
平地	通称「一の権現」といわれ、棟札には伊津那大権現と記されている。以前は鉄道の西側にあったが土地改良がおこなわれ、現在の位置に移された。		新規
河川敷	長井清掃事業所の東、最上川左岸の河川敷に位置する。昭和40年代に石器類が出土している。	石鏃・剝片	新規
残丘	最上川右岸の河川敷に位置する残丘である。頂は平坦に整えられ、北東にのびる尾根には数段のテラスが築かれている。		新規
山腹	虚空像尊が祭ってある尾根に一辺が5~6メートルの高台が築かれている。また尾根沿いに幅2メートル深さ1メートルの溝状の遺構がみられる。		新規
湖畔	この沼は戦前から戦後にかけて造成されたもので沼に向けて2~3の小丘陵が張りだし畑になっていた。この畑から遺物が採集された。	剝片	新規
段丘	通称「森のお観音様」は最上川によって形成された河岸段丘上に位置する。この観音堂の西南側の畑から遺物が採集される。	剝片・碎片	新規

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目
C-41	散布地	打越	長井市五十川字打越	縄文時代	畠地
C-42	散布地 館跡	塔の上	長井市五十川字塔の上	縄文時代 中世	畠地 果樹畠 宅地
C-43	祭祀跡	大寺沢	長井市五十川字大寺沢	中世	杉林
C-44	館跡	古お葉師	長井市五十川字古お葉師	中世	雜木林
C-45	散布地	山田	長井市五十川字山田	縄文時代	桑畠

立地	遺跡概要	遺物	備考
段丘	森ヶ沢川によって形成された河岸段丘上に位置する。南西に広がった平坦地は畠となっており、遺物の散布が見られる。	スクレイバー・剥片	新規
段丘	No. 4 1 の西南約450メートルの段丘上に位置する。高台の西端は切通しとなり、「U」字型の溝が切られている。また、畠地から遺物を採集する。	石器・碎片	新規
丘陵	森地区発祥の地と伝えられている。道路拡張で一部削平されているものの、一辺7~8メートル・高さ約1.5メートルの方形を呈する塚を確認。		新規
山腹	薬師様が祭られていた尾根を上ると、尾根に沿って蛇行するように幅約2~3メートルの「U」字型の溝が走っている。中世の車道と考えられる。		新規
丘陵	津島神社西側の高台に位置する。このたび遺物は採集されなかったが、戦前耕作時に多量の土器や石器が出士したという。	縄文土器・剥片	新規

## N 遺跡の位置と現況



第2図 遷跡位置図



No.1 三五屋敷遺跡近景



No.2 光明寺跡近景



No.3 薬師林遺跡近景



No.4 砂畠遺跡近景



No.5 外屋敷遺跡近景



No.6 半在家遺跡近景

図版1 遺跡現況



第3図 進跡位置図

S = 1/10,000



No.7 深沢館近景



No.8 小豆沢遺跡近景



No.9 三五兵卫坂遺跡近景



No.10 袋西遺跡近景

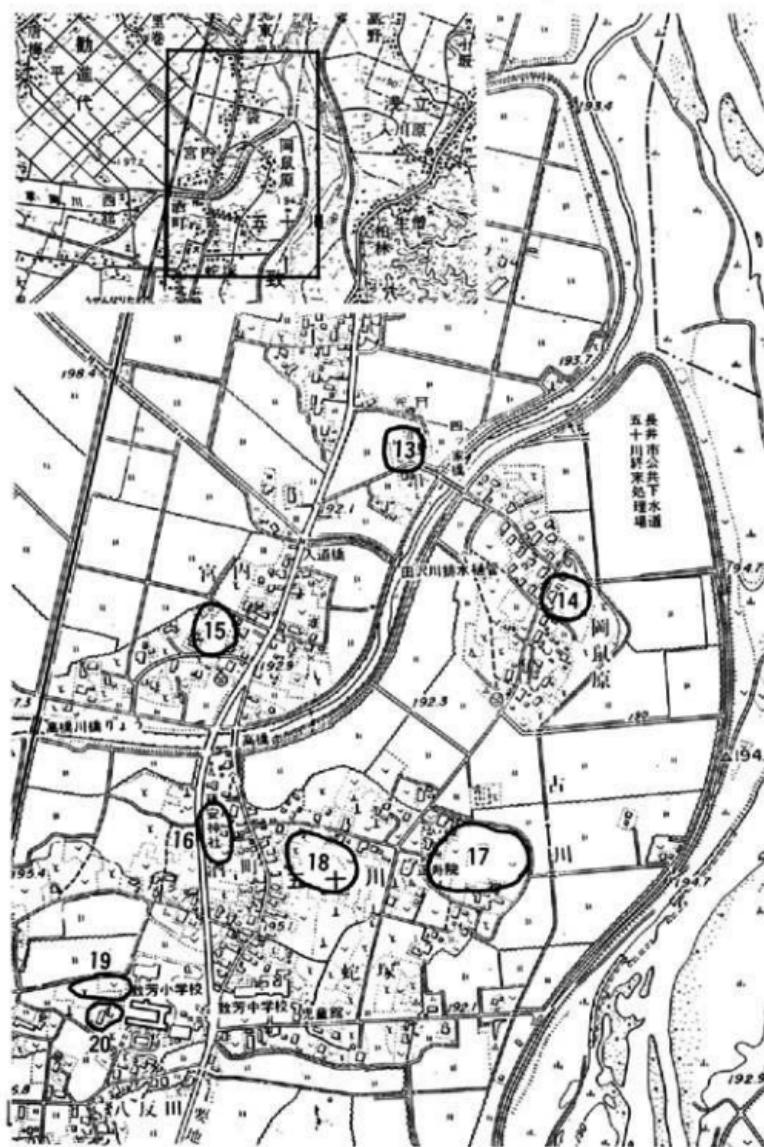


No.11 袋遺跡近景



No.12 色摩館近景

図版2 遺跡現況



第4図 遺跡位置図



No13 四ツ谷館遠景



No14 長者館近景



No15 宮内遺跡近景



No16 酒町遺跡近景

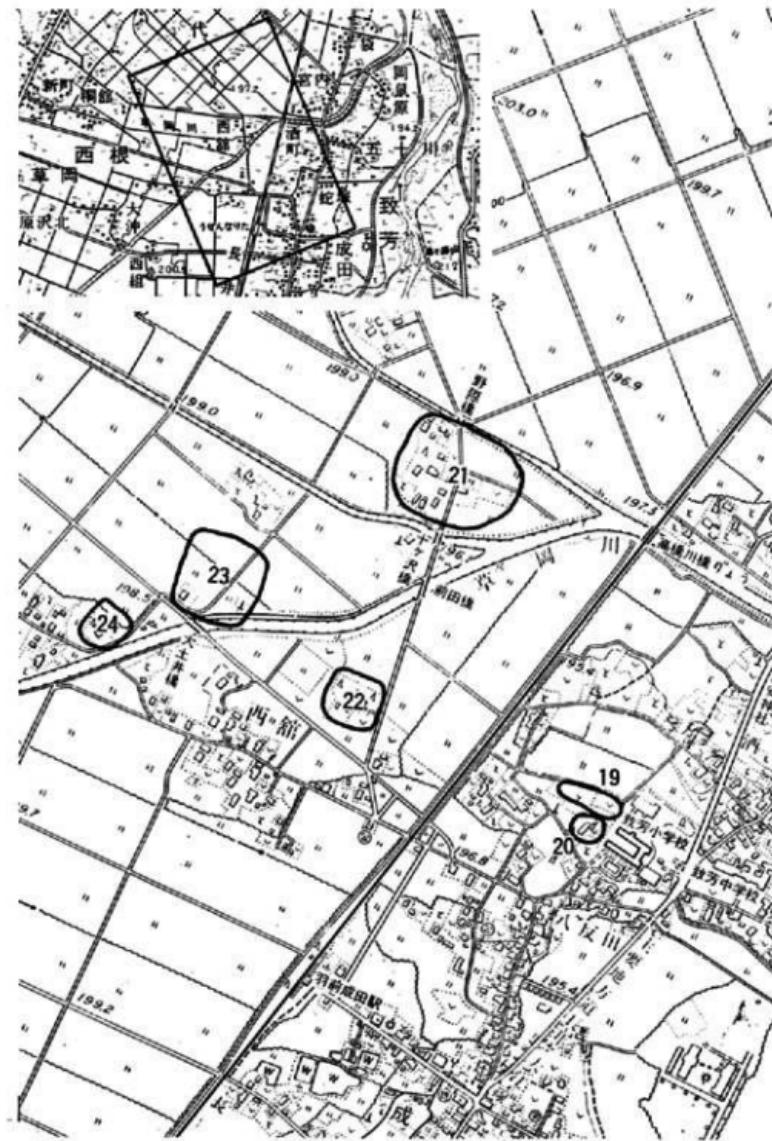


No17 岡遺跡近景



No18 蛇塚遺跡近景

図版3 遺跡現況



第5図 遺跡位置図

S = 1/10,000



No19 唐人屋敷遺跡近景



No20 揚部館近景



No21 野際遺跡近景



No22 西館近景

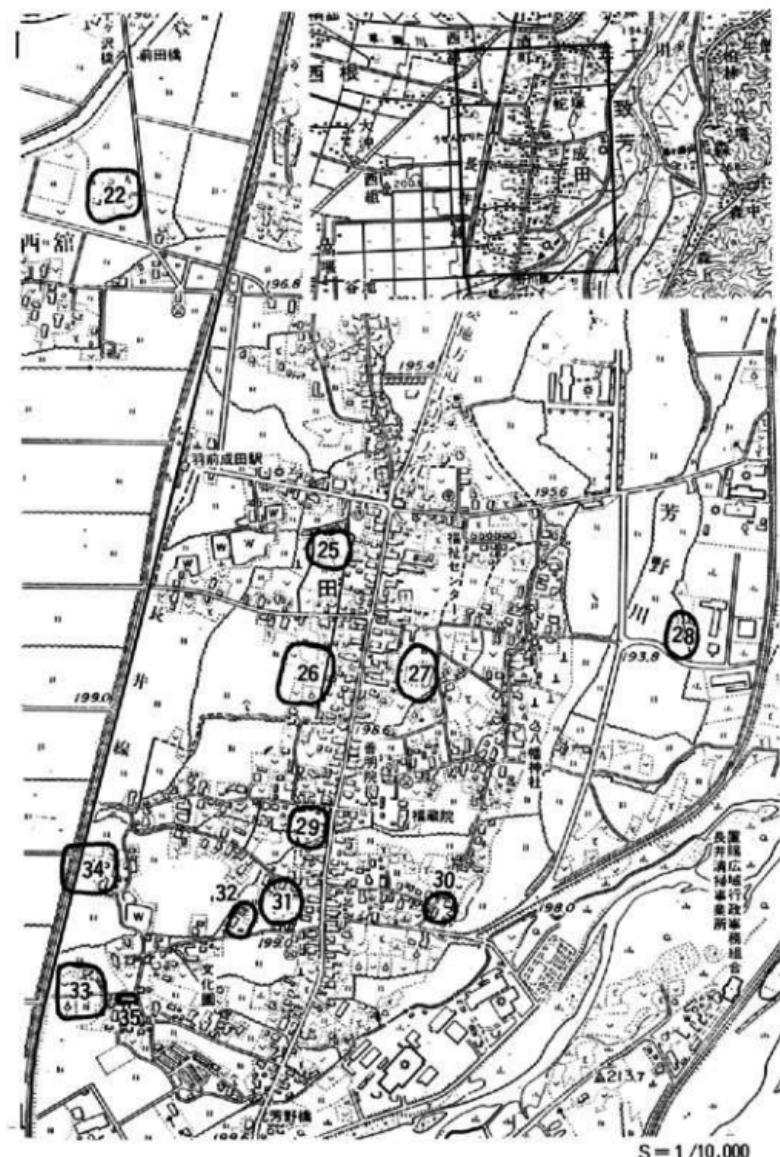


No23 大屋敷遺跡近景



No24 大土井遺跡近景

図版4 遺跡現況



第6図 遺跡位置図



No25 中宿遺跡近景



No26 本宿西遺跡近景



No27 八百刈遺跡近景



No28 間遺跡近景

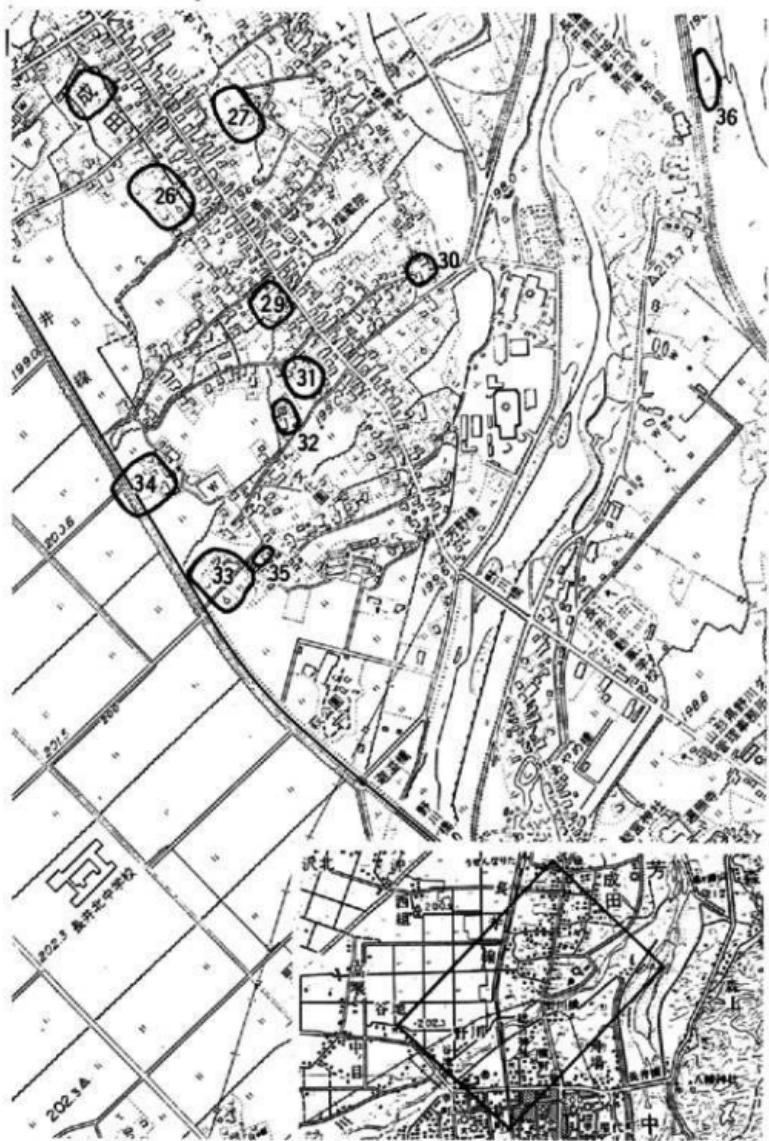


No29 唐網遺跡近景



No30 塔様遺跡遠景

図版 5 遺跡現況



第7図 遺跡位置図



No. 31 三崎遺跡近景



No.32 飯沢窓近景



No. 33 安部館近景



No.34 渡部館近景



No.35 伊津奈大権宮



No.36 中川原遺跡近景

図版 6 遺跡現況



第8図 進跡位置図

S = 1 / 10,000



No37 鶴ヶ森遺跡遠景



No38 虚空像遺跡近景



No39 駒木沼遺跡遠景



No40 観音堂遺跡近景



No41 打越遺跡遠景



No42 塔の上遺跡近景

図版7 遺跡現況



S = 1 / 10,000

第9図 遺跡位置図



No43 大寺沢遺跡近景



No44 古お屋敷遺跡近景



No45 山田遺跡近景

図版 8 遺跡現況

## V 遺物について

この度調査で新規に発見した遺跡は45遺跡で、その中で採集した遺物は121点である。採集した遺物のうち、縄文時代の遺物の殆どが白兎地区のいわゆる山手の遺跡からの採集である。そのほか五十川・成田地区からのものも若干あるがそれらは極く限られた地点からの採集である。最上川の両岸、特に西山から流れる中小河川による沖積平野の方々には古墳時代以降の遺物が散在している。そのうち遺跡No.16・17・18等はもっと詳細な分布調査を実施して遺跡の性格を把握すべきであろう。

遺物の図版9～12について特長的なところを次に略記する。図版9の①は縄文時代の籠状石器であるが横削ぎによって製作している。9の③の左側はフレーク（縄文時代）、右側は摺鉢の破片である。摺り面からみて18世紀中頃に位置づけたい。9の⑤も摺鉢の破片である。その胎土が密で高温で焼かれ鉄紺がかかっている。17世紀中頃のものと思われる。9の④は縄文時代の石皿で水田の基盤整備のとき地表から50センチの地中からの出土したものという。9の⑥のうち上段の右2点と下段の右2点は石器のフレーク、上段左2点は縄文土器片で表裏とも赤褐色で胎土に石英砂を多量に含んでいる。この2片は縄文後期の壺の内などにみられる特長を有している。下段左は摺鉢の破片で②に比べて摺り目が細かく18世紀末頃と思われる。そのほか土管破片手あぶり破片なども採集する。9の⑦の左側は土師器で胎土に石英砂を多量に含むことや口縁部にかえしのあることなどから10世紀に位置づけたい。右側は角火鉢の破片である。

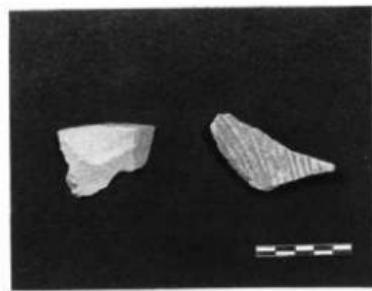
図版10の①の左は土管の破片、中は赤焼のかわらけの破片、右は摺鉢の破片で19世紀の終り頃のものか。10～②は縄文時代磨石の破片、10の③は縄文時代の土器片で9の④の土器片と同様の特長を備え年代も同じように考えたい。10の⑤の右は土瓶底部の破片で中に釉薬をかける。19世紀初頃のものと類似している。左は須恵器破片で表は横ケズリ内側はカチ目、10の⑥は下段右を除く5点は須恵器の破片、上段左から壺・甕・杯の破片、下段2点も杯、外は横ケズリ、内側はカチ目、10世紀前半に位置づけたい。右は七輪の破片である。

図版11の①は珠州系土器の破片で室町頃のものか。11の②も珠州系土器片11の③の左は磨石、右は中世陶器破片（抹茶碗）10の④は磨石、10の⑤の上段左からフレーク、須恵器破片、中世陶器壺の破片、盃、下段右は天目茶碗（18世紀頃か）中は甕、黒は不明だが会津・相馬も考えられる。左端は成島の鉢の破片で19世紀前半位置づけたい。11の⑥の上段左は石器のフレーク、右は赤焼土器の破片、下段左は摺鉢破片18世紀後半に位置づけたい。右は会津系陶器の破片で18世紀末のものか。

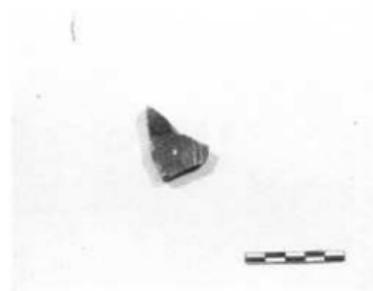
図版12の①は摺鉢破片で18世紀末の頃のものか。12の②は縄文時代籠状石器、12の③の右と左は石器のフレーク、中は石核である12の④の左は石器の碎片、中は土鍋の破片、右はすり鉢口縁部破片。12の⑤石器のフレーク、12の⑥は不定形石器、右は剥片である。



① No 1 三五屋敷遺跡



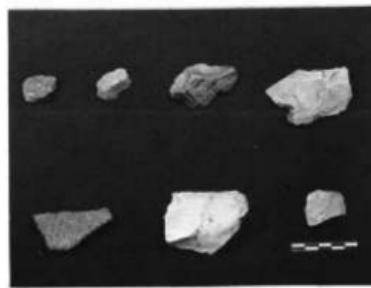
② No 3 薬師林遺跡



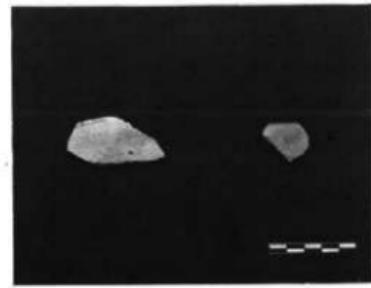
③ No 4 砂畠遺跡



④ No 5 外屋敷遺跡

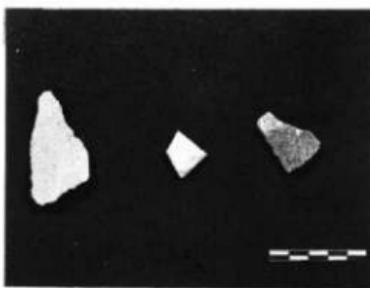


⑤ No 6 半在家遺跡

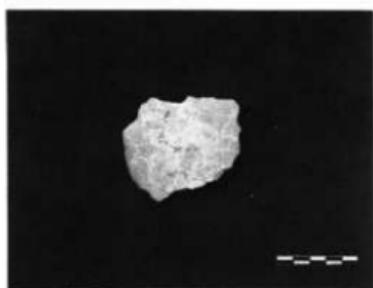


⑥ No 8 小豆沢遺跡

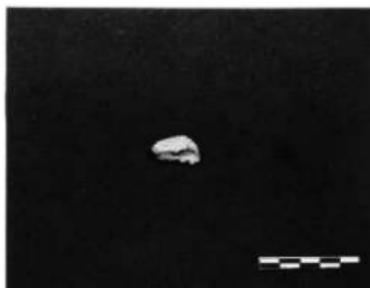
圖版 9 分布調査遺物



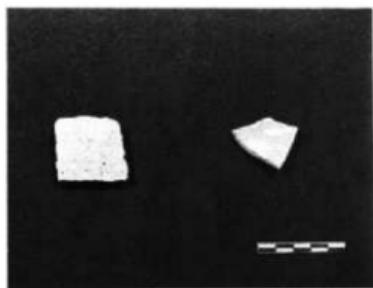
① No9 三五兵卫板遺跡



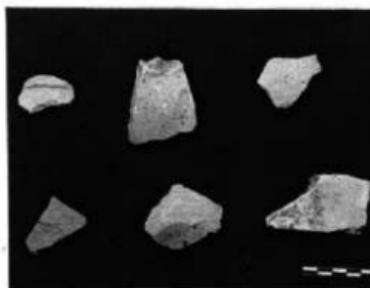
② No10 袋西遺跡



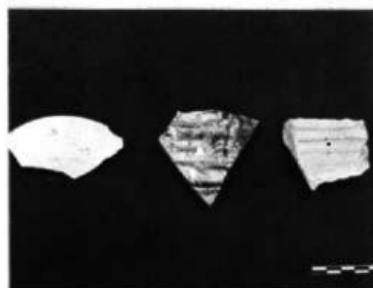
③ No11 袋遺跡



④ No15 宮内遺跡

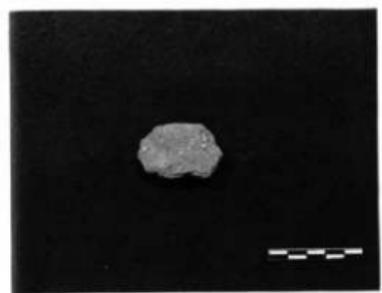


⑤ No16 酒町遺跡

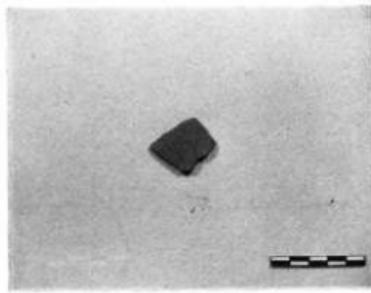


⑥ No17 岡遺跡

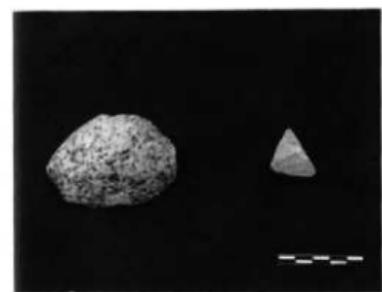
図版10 分布調査遺物



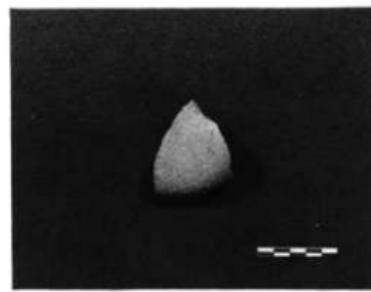
① No.18 蛇塚遺跡



② No.19 唐人屋敷遺跡



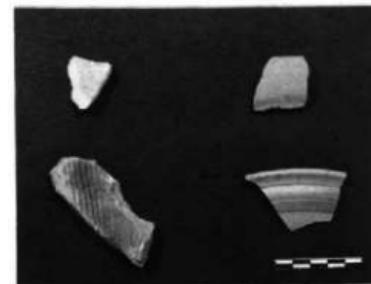
③ No.21 野際遺跡



④ No.25 中宿遺跡

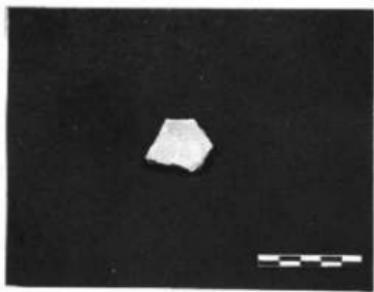


⑤ No.26 本宿西遺跡

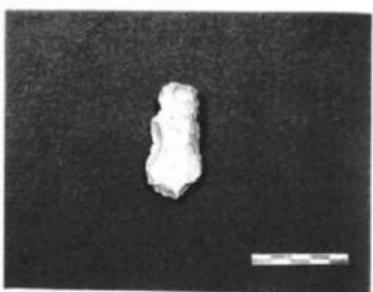


⑥ No.26 本宿西遺跡

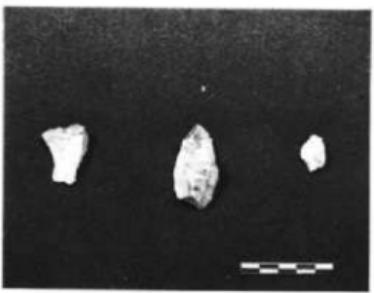
図版11 分布調査遺物



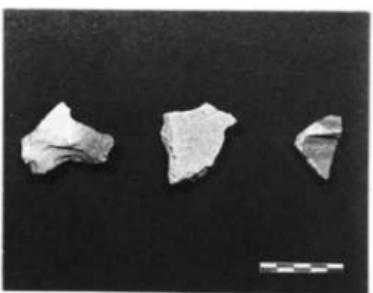
① No27 八百判遺跡



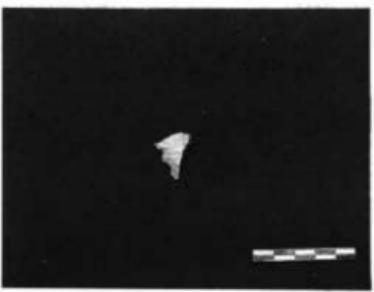
② No29 唐網遺跡



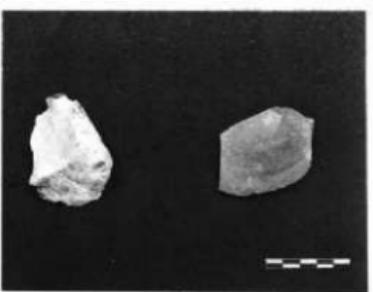
③ No40 観音堂遺跡



④ No41 打越遺跡



⑤ No42 塔の上遺跡



⑥ No45 山田遺跡

図版12 分布調査遺物

# VI 須刈田大野平遺跡確認調査

## 1 須刈田大野平遺跡これまでの歩み

須刈田大野平遺跡の発見は昭和33年、南陽市大字漆山字須刈田の本木繁美氏が当地を開墾中に土器や石器を採集したのが発端となる。

昭和35年、山形大学の柏倉亮吉教授を中心とする山形県総合学術調査会が結成され発掘調査が実施された。その結果、縄文時代早期の住居跡1棟、縄文時代前期の住居跡1棟をそれぞれ検出したほか、縄文早期から中期にかけての土器、それらにともなう石錐・石匙・石対・石籠・搔器他が多数出土した。特に住居跡から出土した沈線文系の尖底深鉢（田戸下層式並行）は、縄文時代早期の文化を究明するうえで貴重な資料である。

その後、地権者の本木辰雄氏には親子二代にわたり遺跡の保護につとめるかたわら、耕作時には丹念に遺物の収集を行なってきた。

昭和59年、南陽市教育委員会は市史編さん事業にあたり、本遺跡の重要性を認め発掘調査を実施した。検出された遺構は縄文時代早期の住居跡1棟、縄文時代前期の住居跡1棟他である。遺物は縄文早期の沈線文土器から縄文前期の羽状縄文土器をはじめ、それらにともなう石錐・石錐・籠状石器・搔器他が出土した。

これらの調査から、本木辰雄氏は本遺跡の保護と活用の立場から遺跡を見下ろす高台に堅穴住居を復元し、大野平キャンプ場を開設し地域興しに役立てている。

## 2 遺跡の立地と環境

長井市の東部に位置する伊佐沢地区は出羽丘陵の南端部にあたり、周囲を丘陵に囲まれ、南方に向けて開口する盆地状の地形を呈する。大石沼を源にする逆川は伊佐沢地区の中央部を南流し、松沢で最上川と合流する。そのため同地区のいたるところに河岸段丘が発達し、数多くの遺跡が点在するところである。縄文時代と平安時代の遺跡を中心に各時期の遺跡がみられる。また中世の館跡が隨所にみられる。平坦地に構築されたのものと、山頂部に構築されたものの2種類に大別することができる。小関氏宅は三間幅の館濠を旧遺構のまま現在まで伝え、堀には今も水が張られ中世のたたづまいを醸し出している。

本遺跡は伊佐沢地区の東端、若松山から東に張りだした尾根の鞍部に位置し、北東方向に開口部をもつ馬蹄形の地形を呈し、開口部に向けてゆるやかに傾斜している。標高は約460メートルで湧水にもめぐまれ、以前は野鳥が集まる場所であったため「鳥取場」と言われていたという。現在は牧草地・畑地となっており、台地の全域から遺物が採集される。

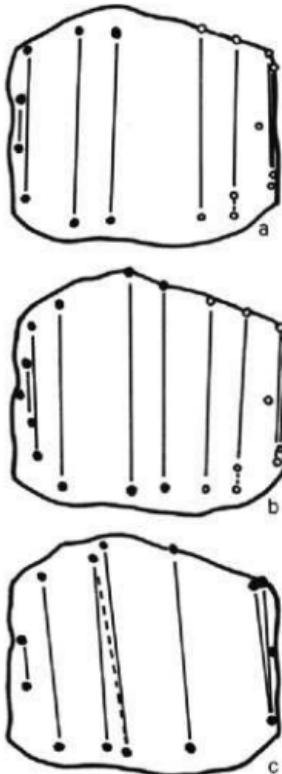
### 3 検出された遺構

今回の調査は、南陽市第2次調査で第4号住居跡とされた遺構の未発掘部分を完掘し、住居跡の構造を明らかにすることをめざした。第11図の100ラインのズレは、南陽市第2次調査時は、長井市との三本の境界標柱石のうち中心以南を基準とした（南陽市1986）に対し、今回は中心以北を基準としてトランシットを180度南へ振ったため生じたものだが、杭打ちの都合や図化するにあたって区別のつきやすいように、あえてそのままにした。第11図は南陽市報告書の北東コーナー部分と、今回の調査結果と合わせて作成した。

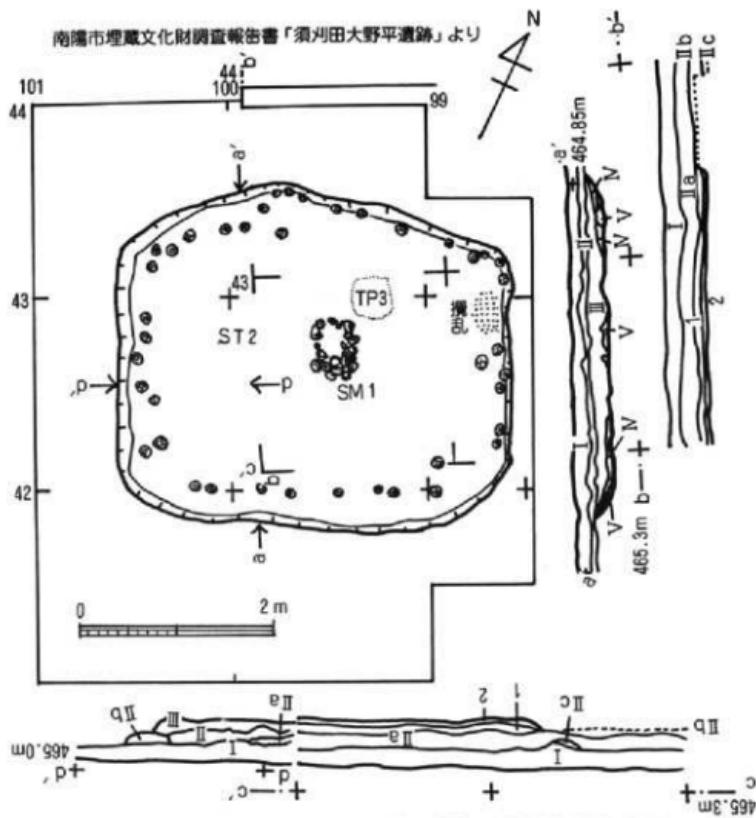
遺構の確認面はⅡ層である。Ⅱ層上面でも概形はつかめた。推定された通り長方形を呈する。規模は約3.5m×3.9mであるが、北東コーナーがやや内に入り込んでいる感があり、不整な形となった。全周に、41個の柱穴がめぐらっている。主柱穴は確認されなかった。また今回調査された部分は、柱穴が壁から少し離れて存在していたが、拡張等を示す証拠は認められなかった。試みに軸方向を同じくして対になりそうな柱穴を結んでみたのが第10図a～cであるが、a・bは東側では同じ柱穴を利用しながら西側のみ異なったセットを、またcは全く異なるセットを想定できる。同じ床面を用いて二度にわたる建て替えが行なわれたのだろうか。この点に関しては土器の貢で時期の問題も含め再考する。

#### 層位について

- I層 茶褐色砂質土。粘性の強い表土。
- II層 單茶褐色砂質土で少量の黒雲母片を含む。
- III層 黒褐色砂質土。覆土で、小礫（基盤の花崗岩に由来する）が混じる。  
この3層が基本の堆積で、概ね水平である。
- IV層 d-d'セクションに認められたもので、粘性の少ない黑色砂質土である。かなりの量の炭化粒子・黒雲母片を含む。Ⅳ層堆積後の攪乱と思われる。



第10図 柱穴変遷想定図



第11図 住居跡平面図と土層セクション

Ⅲ層 d-d'セクション上の径約4.0cmの落ち込みで、黒色砂質土。西壁部分を一部掘り込む形となっている。Ⅲ層堆積後～Ⅰ層堆積前のものと思われ、特に関連する遺物はみられなかった。

Ⅳ層 a-a'セクションに認められた壁土の流れ込みである。

Ⅴ層 黒褐色砂質土。一部地山（黄褐色砂質土）も含む。

概略は以上の通りである。覆土を2層に分離することはできなかった。b-b'、c-c'セクション図は南陽市第2次調査時のものである。地点はやや異なるが、同じ東西方向なのでa-a'セクション図はc-c'を重ねて示してみた。

## 4 出土遺物

### (1) 土器

今回の調査で出土した土器は計168点であるが、大きく4つに分類できる。大筋では南陽市第2次調査報告書の分類の枠を出ないものの、いくつか新知見も得られた。ここでは、比較的の状態の良好な資料69点を図示した。（第12図～第17図）

#### 1 沈線文系土器（第1図1～3）

・沈線文のある繊維を含まない土器である。2は表面が風化しているが、焼成は概ね良好である。1・2は同一個体と思われる。横位と斜位の沈線を基本とし、2には縦位の太い短沈線も認められる。3は平行沈線が3本横走する。関東地方の田戸下層式に比定され、南陽市分類「第1群」に相当する（以下は南陽市分類の文言は省略し、「」で表す）。

分布 4点の出土で、99～100-41～43グリッドにまばらに分布している。比較的低位の出土である。

#### 2 条痕文系土器（第1図4～第14図23）諸特徴から5つに分類できる。

・横走する細隆起線文をもち、繊維を含まない土器で、1点のみ出土している。特徴からみて南東北の櫛木1式に比定できよう（第12図4）

分布 100ライン上41%のやや南東の位置で、覆土の上位から出土である。

・工具により横位の条痕が施され（時に深く削るような感じで引いている）、円形の刺突も2ヶ所に認められる。やや大きめの砂を含む繊維の混入もみられる（第12図5）。

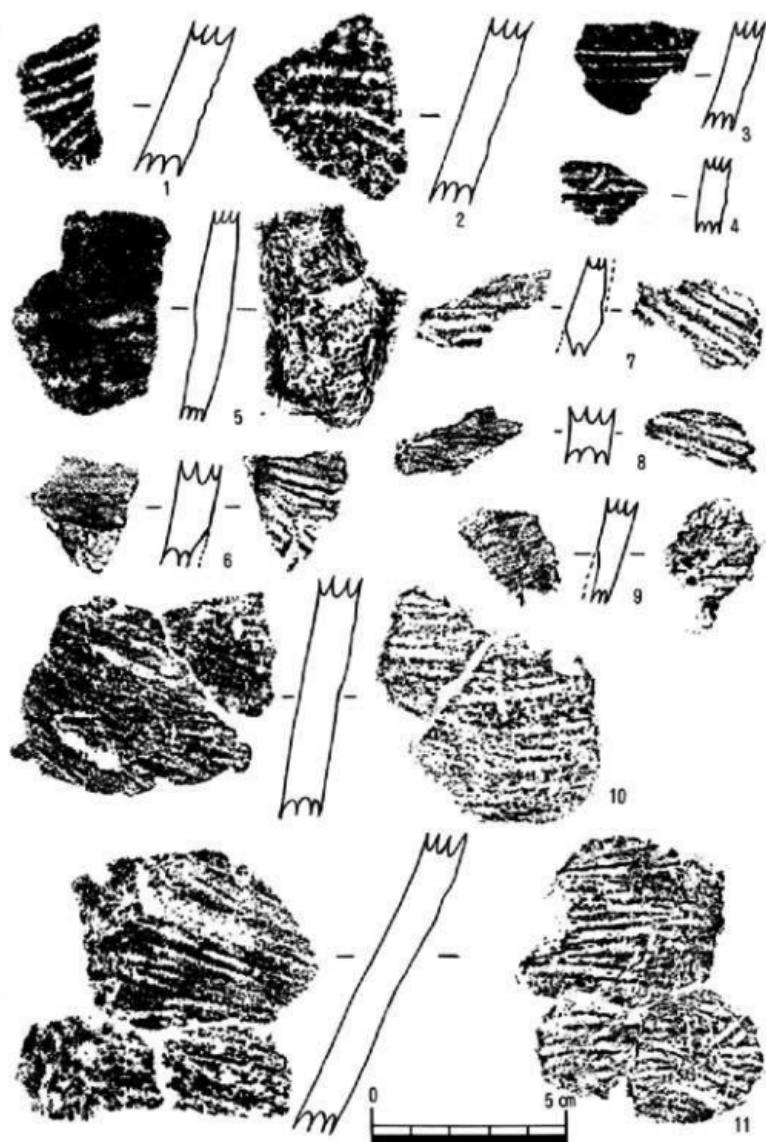
分布 100%、42%ラインの交点付近の位置で、覆土の中位の出土である。

・表裏に条痕があり、繊維を含む厚手の土器である。図示できなかったが、この土器の底部らしい破片が1点あり、平底を呈すものと考えられる。「第1群第2類」に相当する。色調は黄褐色である。（第12・13図6～11）。

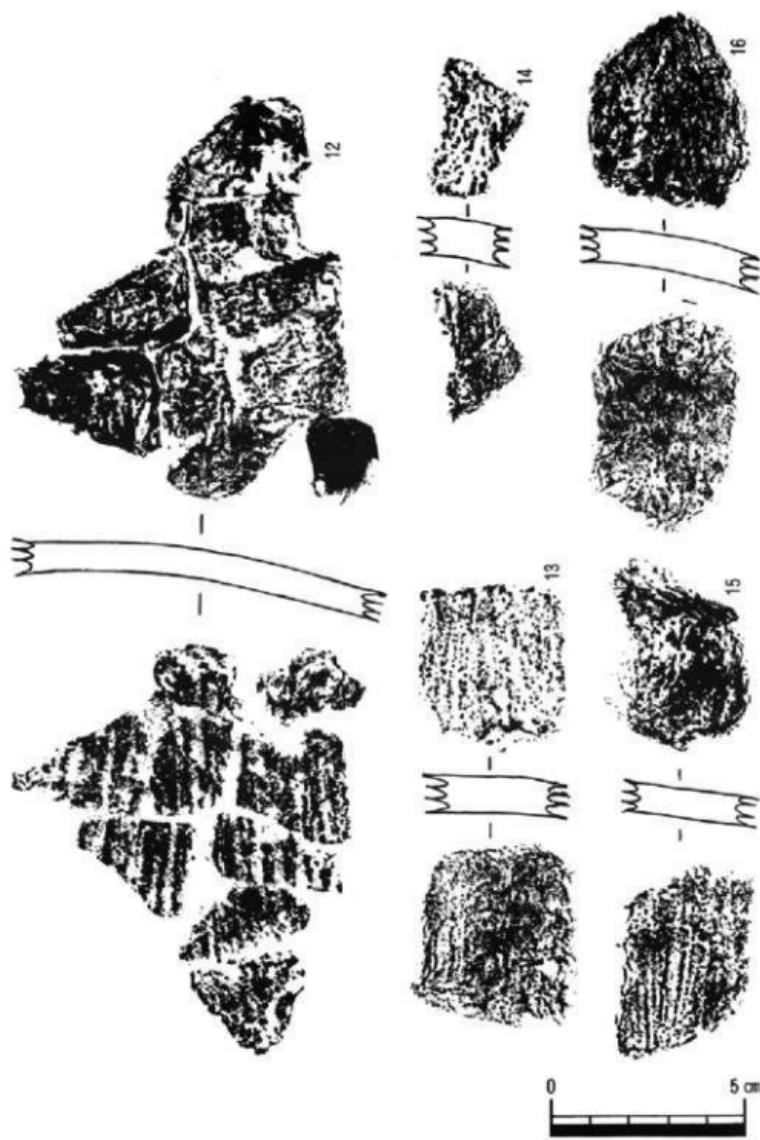
分布 北西コーナーを中心に100～101-42%～43%Gにかけての出土した。覆土中位を中心とするが、表土中のものもあった。

・今回やまとまって接合したのが第13図12図である。表面に太い条痕文が横位に施されている。焼成は良好で大粒の砂を含み、繊維の混入がみられる。内面の条痕はあまり明瞭ではない。これよりやや厚く表裏に条痕のみられるのが第13図13・14、やや風化しているものの第13図16、第14図17も同様、また第4図20は底部付近と思われ平底を呈す土器が想定される。第13図15は他がすべて赤褐色を呈す中で、黄色が強く異なった印象を受ける。以上は「第1群第3類a」に相当する。しかし、前2者の体部とは思われない。

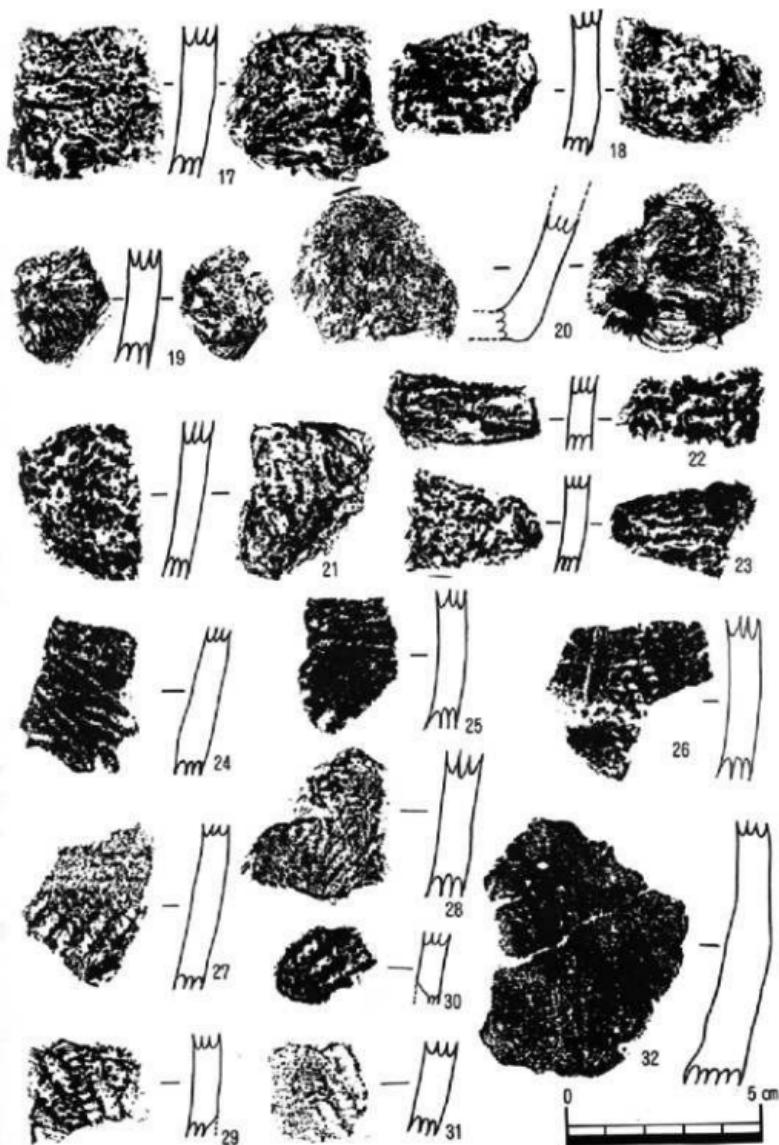
分布 98%～99%～41%～42Gに集中する傾向を示し、覆土中位から表土にかけて



第12図 土器拓影図(1)



第13 土器拓影圖 (2)



第14図土器拓影図(3)

わりに散在する。

・第14図21～23は表裏条痕のあるものの中でも薄手の土器で、内面には煤の付着がみられる。特に内面の条痕が縦走することは限らない。全体図も不明である。

分布 北西コーナーの弦にあたるような、ちょうど南北方向に点在する。覆土低位から中位にかけて出土した。

### 3 縄文・条痕文系土器(第14図24～32)

・内面は黒もしくは茶褐色を呈しなめらかに調整されている土器で、外面は条痕文(横位・斜位)を基本とし、その上にまばらなR Lの楕文を浅く施文している。「第Ⅲ群」に相当し、第14図32は表面に縦位の調整痕を有すのみ。この一群の胸部から底部にかけての部分で尖底を呈すと考えられる。

分布 南陽市調査時の分布と合わせて考えても、99 1/2%～100-42 1/2%～43 1/2%にかけて集中的に分布する。ほとんどが床面もしくは覆土低位からの出土であり、この住居跡の営まれた一時期を示すことは疑いない。

### 4 羽状縄文系土器(第15～17図33～69)

・沈線と燃糸圧痕とで文様構成され、燃糸圧痕、蕨状燃糸圧痕文、籠状もしくは棒状工具による沈線とが巧みに組み合わされている。出土したのはほとんどが口縁部付近の破片で、体部以下がどのような文様構成をとるかは不明である。南東北の上川名Ⅱ式に比定され、「第Ⅳ群第1類」に相当する(第15図33～38)。

分布 北西コーナーを中心に分布し、覆土中位から出土した。

・結束羽状縄文を有する土器で、幅2cm前後のR L・L Rの原体を結束させて施文している(第15～17図39～60)。今回の調査では、口唇部斜位の刻みを有する口縁部破片が得られた。また上下を区画するように爪によって隆線をつまみ出しているものも3点出土した。「第Ⅴ群第2類」に相当するが、「第1類」の体部は存在しなかった。圓化できなかつたが、この一群の底部破片が一点出土しており、丸底風の平底が想定される。

分布 北西コーナーを中心に分布し、覆土中位からⅡ層にかけて出土した。

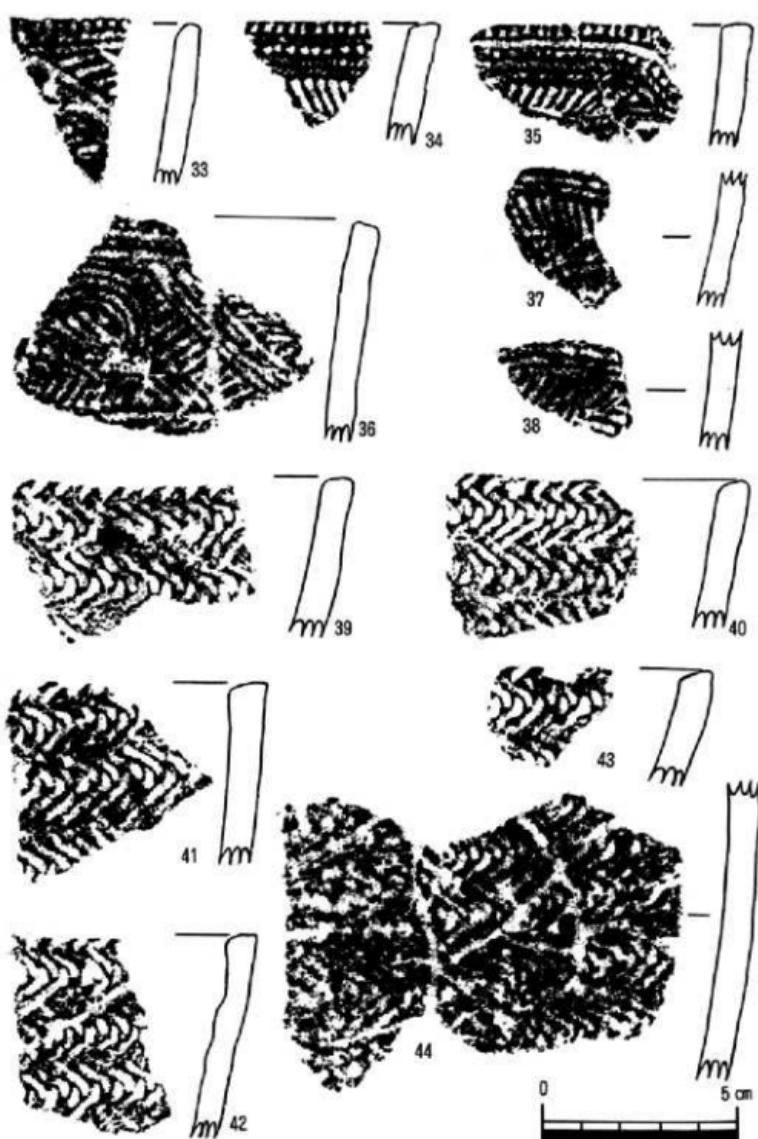
・結束のない羽状縄文をもつ土器である。多量の纖維を含み、第17図64は内面に煤の付着がみとめられる(第17図61～64)。

分布 覆土低位～中位にかけて出土した。

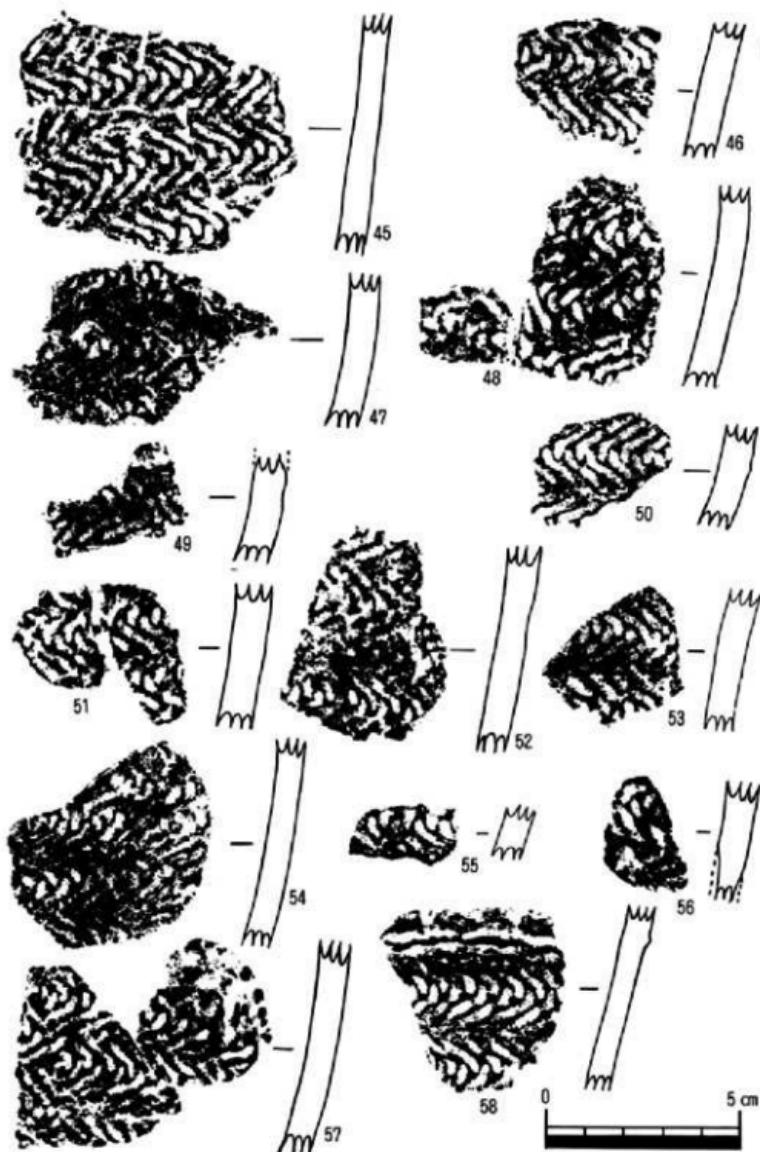
・短かい原体による羽状縄文を有する土器で(第17図65～67)、「第Ⅴ群第3類」に相当する。

分布 北西コーナーを中心に分布し、覆土上位から表土に及んでいる。

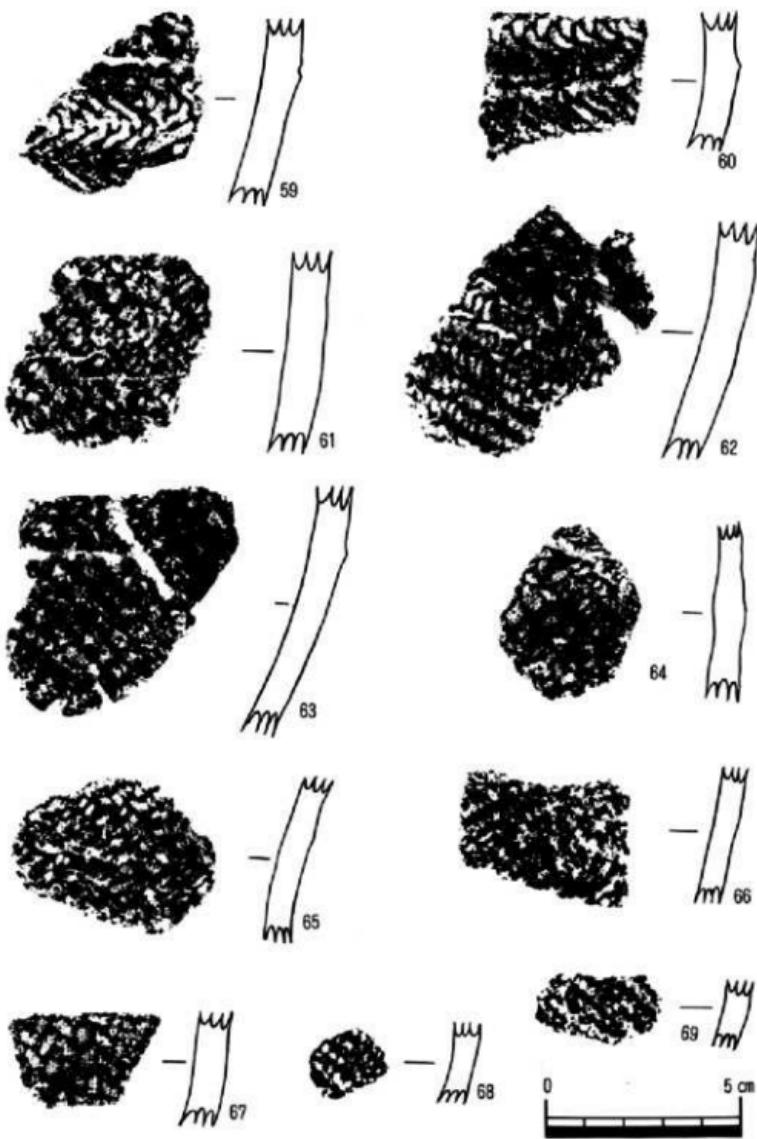
・R Lの原体を用いて楕文を施文した土器である。2点のみの出土で、「第Ⅴ群第4類」に相当する(第17図68～69)。



第15図 土器拓影図(4)



第16図 土器拓影図(5)



第17 土器拓影圖 (6)

分布 100～101-42～43Gに分布し、覆土中位からの出土である。

・垂直分布より

縄文・条痕文系土器（「第Ⅱ群」の時期）がこの住居跡の営まれた一時期を示していることは南陽市第2次調査において指摘されており、今回の調査もそれを裏付ける形となつた。他の土器群では明瞭な層位差は認められない。ただし、分布の中心からみておおよそ次のことがいえる。縄文・条痕文系土器群がもっとも低位に存在し、そのやや上位に（同じかもしれないが）条痕文系土器群、さらに羽状縄文系土器群ということになりそうである。いずれにしても覆土中と思われ、この住居跡は縄文時代早期後葉～前期初頭にかけて継続的に営まれたものと考えられる。その間に数回の建て替えが行なわれたことは想像に難くない。床面や柱穴相互間において時期差を示すような事実はみられなかったが、前述したような図面上の想定も生きてくるのではなかろうか。

## （2）石 器

花崗岩質の礫、川原石等16点を除きすべて頁岩であり、石核2点、剥片69点、石器として図示したもの12点の出土であり、剥片・石核への分析はまだ行なっていない。

・石礫（第18図1）

先端部を欠損しているが、平基無茎石礫である。

・石匙（第18図3）

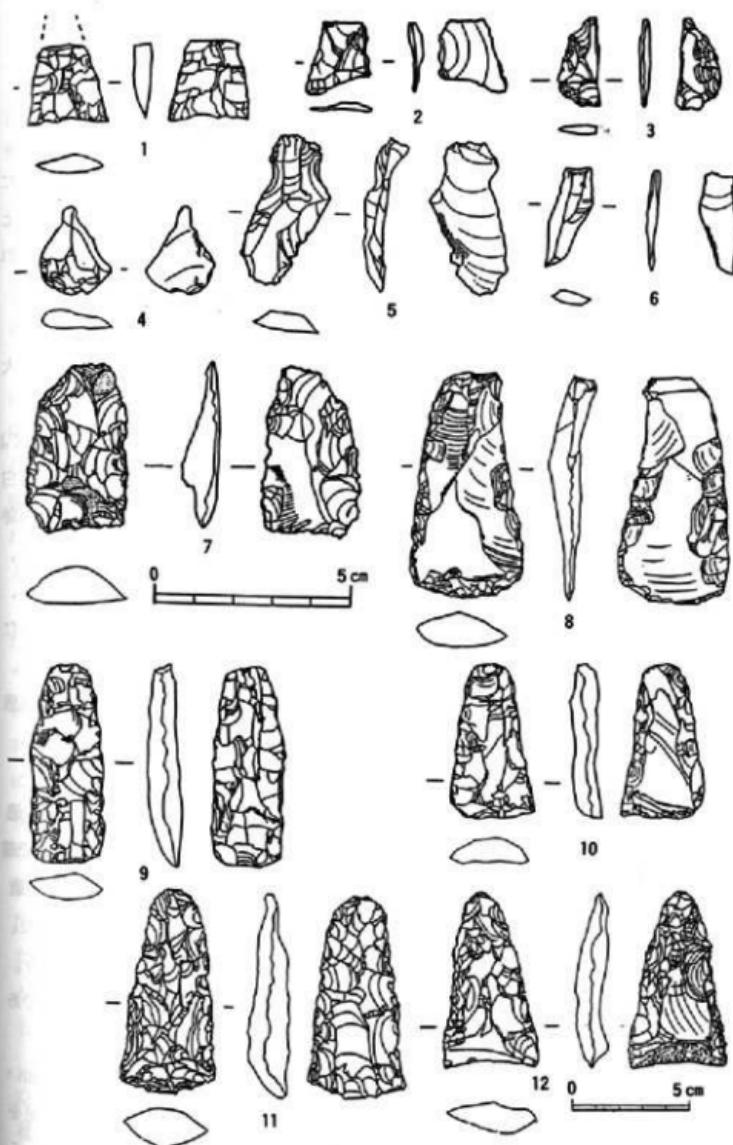
片側半分を欠くが小形の石匙で、画面に刃部調整が施されている。

・剥片石器（第18図2、4～6）

2は形態から石礫基部にも思えるが、腹面に加工がみられず薄すぎるくらいがある。4は両側辺に使用痕が認められ、腹面は未加工で打面が残されているが石匙として用いられたと思われる。5は背面の右側辺に対する右斜め上からの打撃の際に欠損したものと思われる。6は小形の石刃様剥片で、両側辺に使用痕が認められ、ナイフのような利用のされ方をしたものと思われる。

・箆状石器（第18図7、8～12）

7は正面と背面に自然面と主要剥離面を残し、片刃に作り出す作業が完全には行なわれていない。8～12はすべて片刃である。12のように刃部を明瞭に作り出しているものもある。形態は9のみ短冊形で、他はすべて撥形を呈す。8は打点を残したままで、背面に刃部を作り出し、腹面にはそれにともなうリタッチがみられる。出土状況は8・9は住居跡の南西コーナーの出土で、ほぼ同じ地点から8を上位にし、9は床面から出土した。10は100と43ラインの交点のやや北東、a-a'ベルトの覆土中位からの出土である。土器の分布では住居跡の南西コーナーは空白地帯であるが、空間の区分けを想定できるほど土器と石器・剥片等の間に分布の差異は存在しないようである。11・12は北西コーナーからの出土である。



第18図 石器実測図

## VII まとめ

### 1 現地踏査について

致芳地区的遺跡はこれまで数箇所において遺物の出土が伝えられているにすぎなかったが、この度の調査で新たに45箇所の遺跡を確認することができた。遺跡の時期をみると、中世の遺跡が約半数をしめ、次いで縄文時代の遺跡、奈良・平安時代の遺跡と続く。これらの遺跡を地理的条件と言い伝えや文書のふたつの観点から述べてみたい。

#### (1) 地理的条件からみた遺跡の立地

当地区の遺跡の立地にはいくつかの傾向がうかがえる。第一点は南北に走る県道長井・大江線沿いに遺跡が点在していることである。この線は最上川の河岸段丘にあたり、標高が195メートル前後の等高線上に遺跡が点在し、その中でも微高地上からはかならずといってよいほど遺物の散布が見られた。また、この河岸段丘のラインは本地区にとどまらず北は白鷹町、南は長井市街地へとのびており遺跡が確認されている。第二点は西山山麓沿に遺跡が見られることである。昭和57年に実施された遺跡詳細分布調査で明らかにされたが、山麓一帯には数多くの遺跡が見つかっている。本地区もその延長上に位置することから、遺跡の存在は予測されていたが土壇をはじめ4ヶ所の遺跡が確認された。また、前述した最上川の河岸段丘と西山山麓のあいだは、東に向けて緩やかに傾斜する田園地帯である。一帯は昭和40年代に圃場整備が実施され、遺跡に関しては空白地帯であったため外層敷・半在家面遺跡の確認は貴重なものである。

#### (2) 言い伝えや文書と遺跡の比較

第1章の調査区域の概要でも述べたが、本地区には室町時代の僧「有日上人」に関する逸話・伝承をはじめ、弁慶の供養塔、藤原蘿安にまつわる伝承が残っている。この度の調査で確認された遺跡の約半数が館跡・土壇・石塔等中世に関するものが多い。しかしここで伝承と遺跡が結びつくわけではないが、発掘調査が行なわれる際は考慮すべき事項であろう。また、当地一帯は戦国時代に伊達氏と最上氏の勢力争いの最前線となつた地帯であったという。多くの館跡や飯沢文書（県指定）が伝わっていることなどは、これらを裏付けるものである。

現地踏査では数多くの遺跡が確認されたこともさることながら、34名の方々に参加いただいた。長年暮らした土地ではあるが、分布調査に参加することにより、はじめて足を踏み入れた土地であつたり、子供の時以来の場所が遺跡であるという話もうかがった。この調査を機会に遺跡や文化財の保護にご理解いただければ幸いである。

## 2 須刈田大野平遺跡について

南陽市漆山地内に須刈田に長井市に所属する飛地がある。そこから田戸下層式併行の尖底土器が出土し須刈田遺跡として広く知られていた。南陽市が行った第2次調査では大野平遺跡としたが、須刈田の名も捨て難く、遺跡の所在地をそのまま遺跡名とした。

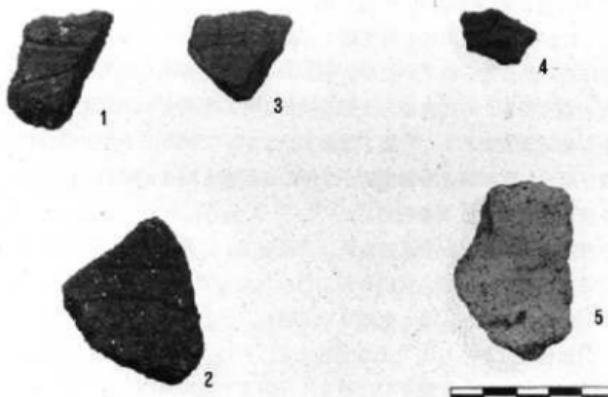
この遺跡は古くから知られていたが、昭和35年柏倉亮吉氏によって発掘調査が行われ住居跡2棟と縄文早期から同前期の土器を検出、そして前記の尖底土器を復元するなど大きな成果を収める調査であった（第1次調査）。続いて昭和59年8月、南陽市教育委員会は調査団を編成し発掘調査を実施し、2棟の住居跡と縄文早期から同前期にわたる多数の土器片を検出し貴重な成果を収めた。

この度の調査は須刈田大野平遺跡の第3次調査で、長井市教育委員会が発掘主体となり山形大学考古学研究グループの援助を得て行ったものである。調査の目的は縄文前期初頭住居の形態を確かめること、第2次調査では隅丸方形の平面プランであろうと推測したが住居の一部分に過ぎなかったのでそれ完掘する。そして2つには住居の営まれた時期を明確にすることとした。第2次調査では縄文・条痕文土器の盛行した時期であることはほぼわかったが、それを明確にすること、その他の土器群層位関係から住居とのかかわりをみることができないか。3つには遺跡の範囲の調査をしようとした。

そのうち範囲確認の調査は日数の制限と調査体制とくに人員の確保が十分できなかつたためこの度の調査から割愛することにした。

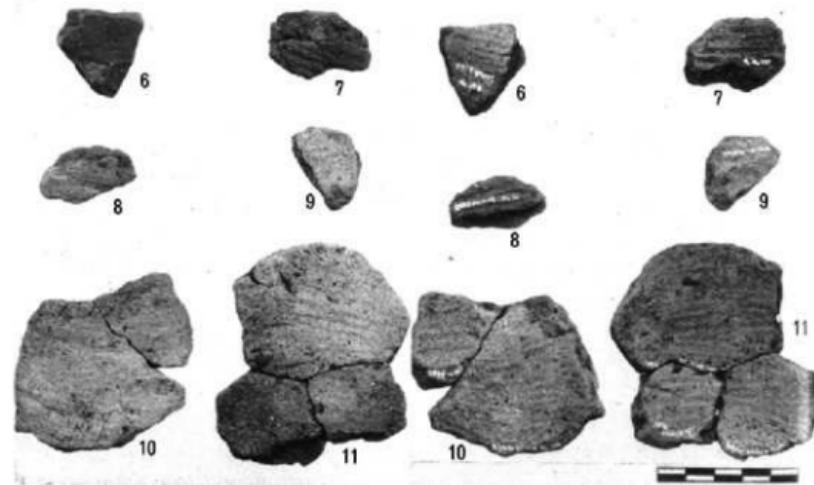
この度の調査は住居跡の完掘によって、3.9×4メートルの隅丸方形の規模であることが確かめられ、そして縄文・条痕文が住居の床面から出土していることはこの住居のつくられた時期を語るものであり、更に覆土中のその上位と思われる層から条痕文系土器群、さらに羽状縄文系土器の出土は、この住居での生活の期間を物語るものであろう。随ってこの住居は縄文早期後葉から同前期初頭にかけて継続的に営まれたものであると考えられるのである。同一の住居をこのように長期間に亘る利用には、当然建て替えがあったと考えられるが第10図のa～cはこのことへの考究である。また同一箇所に長期の生活を可能にしたものには須刈田大野平の立地であろう。標高464メートルの高地であるが四面を山に囲まれた盆地で、食料の調達には事欠くことがなく、アグ抜きに必要な豊富な湧水などはこのことを物語るものである。本木氏所蔵の遺物に縄文早期末葉から同中期中葉のものはこのことを裏付けるものである。

この調査が本遺跡を中心に地域づくりをされている本木氏をはじめ須刈田地区の方々への一助となれば幸いである。最後にこの度の調査にご指導いただいた山形考古学会の加藤稔氏と山形大学考古研究グループの諸君と調査中何かとお世話いただいた本木辰雄氏に謝意を表したい。



沈塘文系土器 1~3

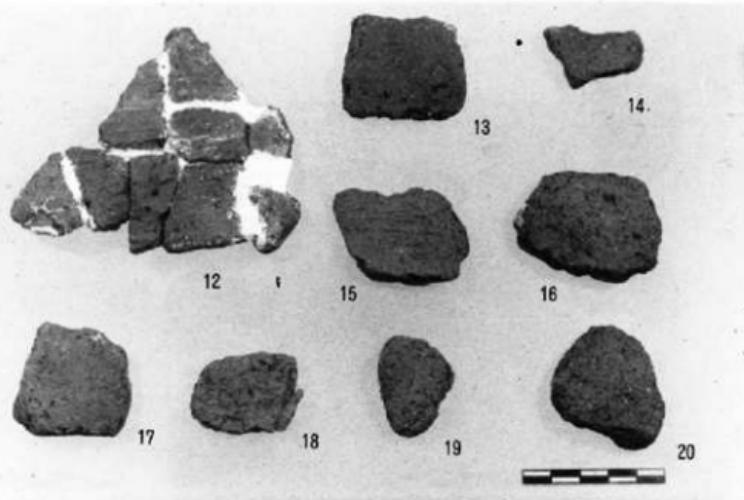
条痕文系土器 4·5



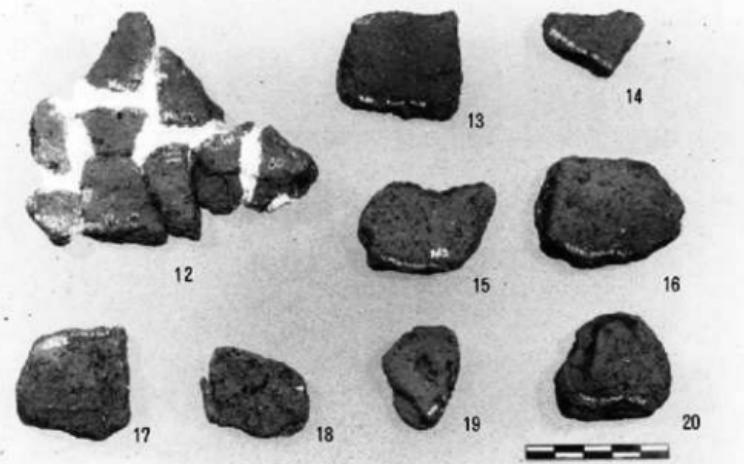
条痕文系土器(表) 6~11

左同(裏) 6~11

图版13 出土遗物

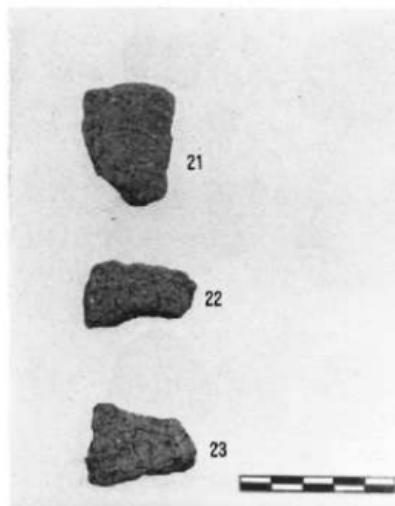


条纹文系土器(表) 12~20



同上(表) 12~20

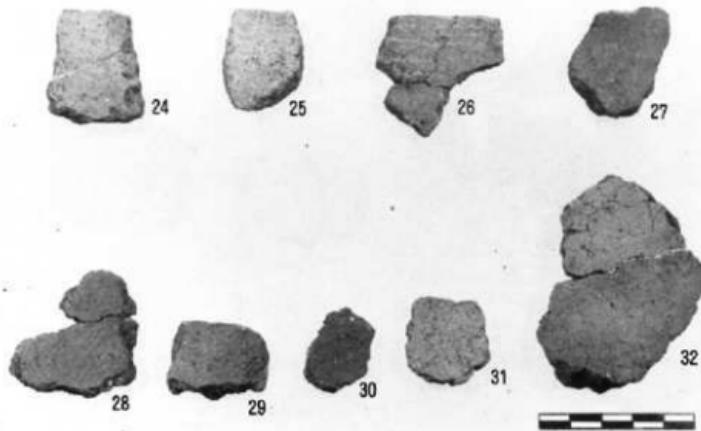
图版14 出土遗物



条痕文系土器(表) 21~23

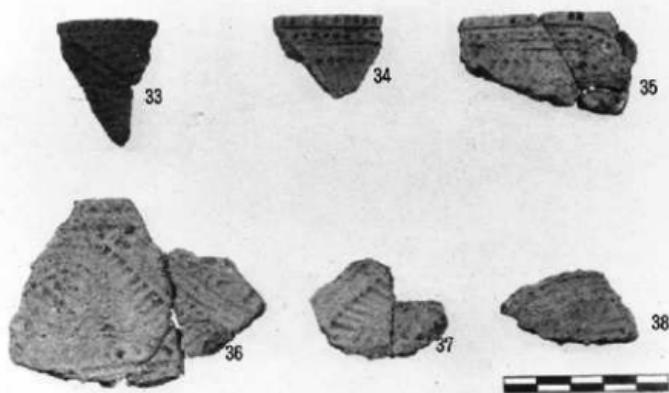


左同(裏) 21~23

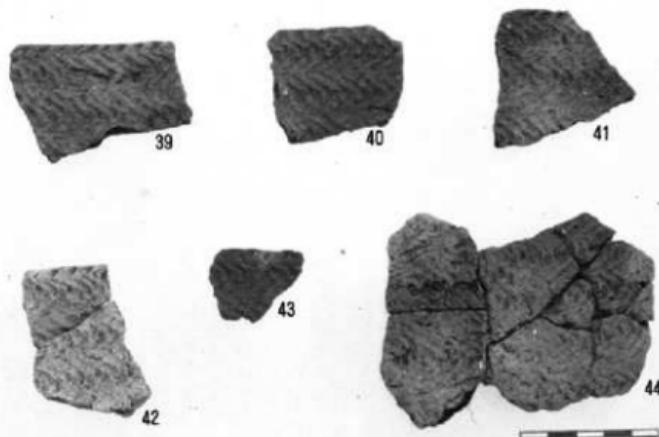


条痕文系土器24~32

图版15 出土遗物

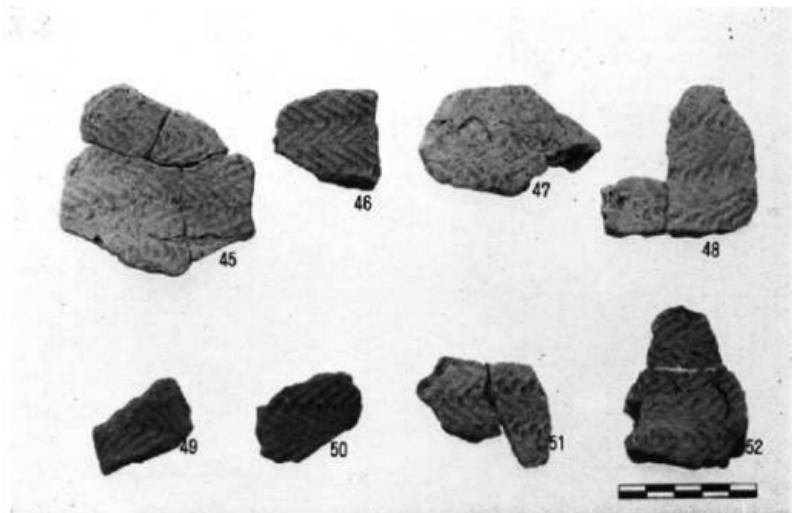


羽状繩文系土器33~38

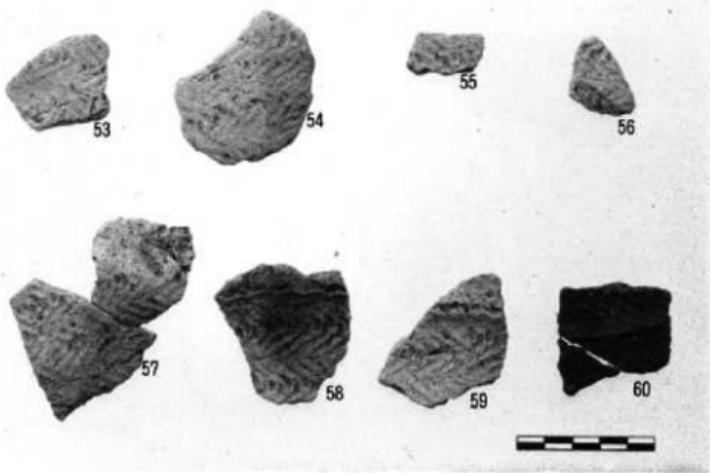


羽状繩文系土器39~44

圖版16 出土遺物

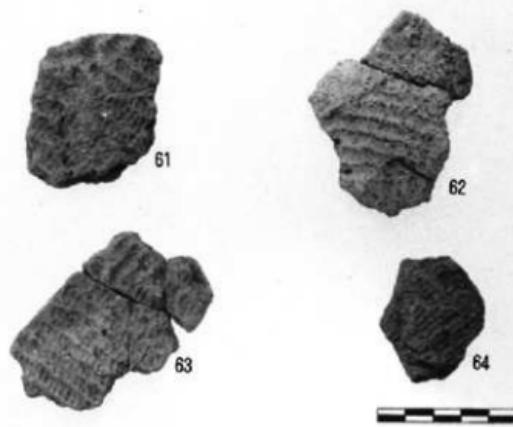


羽状繩文系土器45~52

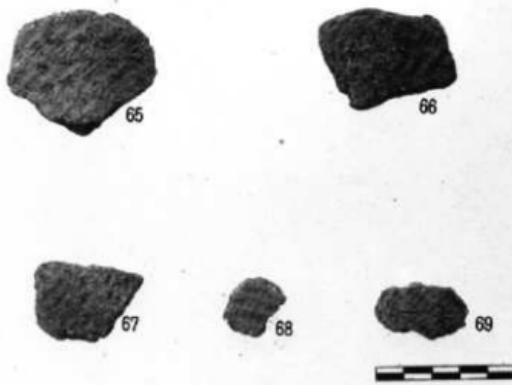


羽状繩文系土器 53~60

図版17 出土遺物

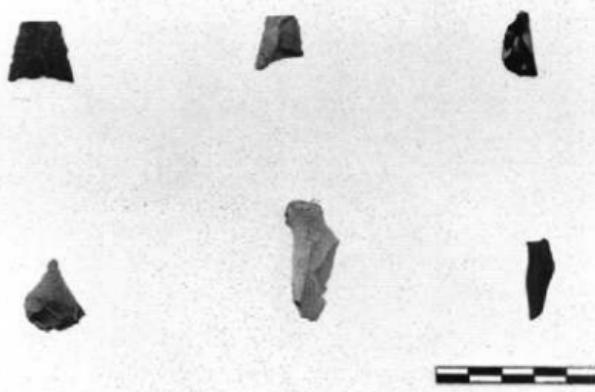


羽状繩文系土器 61~64



羽状繩文系土器 65~69

圖版18 出土遺物



出土石器



出土石器

圖版19 出土石器



遺跡遠景



住居跡全景

図版20 遺跡遠景・住居跡

---

**長井市埋蔵文化財調査報告書第6集  
致芳地区分布調査報告書**

平成2年3月12日 印刷  
平成2年3月31日 発行

**発行 長井市教育委員会**  
長井市ままの上5番1号  
TEL 0238-84-2111

**印刷 ダイヤ印刷**  
長井市高野町一丁目6-20

---